

イソップの寓話から

イソップ物語にロバを売りそびれた父子の話がある。

ある父子が町でロバを売ろうと、炎天下、ロバをつれて歩いていた。途中、川で洗濯していた女性から、「こんなに暑いのに、どうしてまた二人して歩くのかい」と笑われた。そこで、父親は息子をロバに乗せることにした。しばらくして、向こうからきた一人の老婆が、「この不孝者、どうしてお父さんを歩かせるの!」と叱りつけた。息子はびっくりしてロバから飛び降り、父親が代わりにその背にまたがった。

次に出会った一人の旅人は、「お父さんだけが乗って、どうして息子は乗せないのかね」と、あきれ罵った。それもそうだ、今度は親子二人してロバにまたがった。やがてある畑の横を通り過ぎると、農夫が心配顔で声をかけてきた。「二人して乗っちゃ、ロバがすっかり疲れるじゃないかね。そんなロバは売れっこないよ」。父子はなるほどと思い、天秤棒にロバの足をくくりつけてぶら下げ、前と後ろでかついで行くことにした。

ちょうど橋の上にさしかかった時、ロバが苦痛のあまり暴れ出した。あっという間もなくバランスをくずし、ロバは川の中に転落。そのまま溺れ死んでしまった。結局、父子は人の意見に振り回されたあげく、大事な売り物のロバを死なせてしまったというわけである。

他人の意見に耳を傾け、少し立ち止まって考え、参考にするのは、たしかに大切なことである。しかし、他人からの指示や命令に、そのつど唯々諾々と従ってしまうというのは、やはり自己評価や自尊心が低いということになりはしないだろうか。この寓話が教える教訓とは、何事にせよ自分で決めたことは、傍からの意見に左右されず、信念をもって目指す目的に最適化した行動を貫くべきだということである。

教団人の信仰世界への警鐘

宗教教団の内部でも、一人ひとりの信仰者の人生行路を考えたとき、この寓話の教訓がかなりの程度あてはまるのではないかと思う。

指導的立場にある者から「あれをせよ、これをするな」と、常に指示や命令を受け、その通りに動いているばかりでは、いつまでも信仰者としての自立性や主体性を確立することができないだろう。また、信仰者の側も常にそのような指図を仰ぐようであっては、いつまでも指導者への依存性から抜けられず、他律的に振り回される信仰になる。

もちろん一定の信仰的指導は必要なは言うまでもない。しかし、信仰の主人公はどこまでもその信仰者自身なのである。信仰生活において、自分自身と超越存在である神仏との間に、別な人間が介在してくると、その分だけ人間的な要素が混入して、神仏との直接的なつながりが薄れてしまう。そうなってしまえば、人生の求道もぐらついて、大事なものを取りこぼし、目指す目的をつかみ損なう危険性もあるのだ。

私は、信仰とは「信心」、つまり自分の心を信じることだと思う。すなわち、信仰とは自らに自信を持つことである。自分には神仏がついているからこそ、自己を信頼して自分の道を

堂々と進むのだ。この気概ほど、今日の教団人の信仰に求められているものはない。

信仰者が自分の頭でものを考えるほどの人間であれば、さすがにイソップ寓話の中の父子のように、傍からのどんな指導や命令であっても、それに唯々諾々とは従うことはないであろう。従うにしても、自分なりに考えて判断するべきである。私は、そのぐらいの自尊心は当然持つべきだと思う。

でも、納得がいかず、おかしいと思いつつも従ってしまうという場合がある。その時、素直に従うのが正しいと自分に言い聞かせる。しかしそこにどうしても無理があると、心の中で葛藤が起り、神経症に苦しむことにもなる。あるいは本人のいないところで、指導的立場にある者のことを悪く言う。どちらにしても、教団内の士気は下がるばかりである。本当にもったいないことだ。

教団活性化の道筋も見えてくる

実を言えば、宗教教団の外部の視点に立つと、こうした人間関係の姿がかえってありありと見えてしまうものである。信仰を持つのは大切なことだし、自ら道を求めたいとは思うけれども、特定の宗教(教団組織)に所属してまで信仰はしたくない。こうして宗教教団の手前やその周囲で二の足をふんでいる人々がいかに多いことか。

人々のこの思いを直視しないと、教団型の宗教は布教伝道や人間育成は困難であると見てよい。その人生行路にことあるごとに口をはさみ、自分の言う通りにさせてしまうようでは、信仰者のエンパワーメントには決してつながらず、それどころか見えない鎖でぎりぎりと拘束するものにしかならない。以前にも書いたことがあるが、入ってくる信者を鳥モチのように捉え、そこに閉じ込めて逃がさないという「教団ホイホイ」のようなあり方では、最初から敬遠されてしまうだろう。

でも、ここまで考えるならば、どんな宗教教団でも活性化の道筋は見えている。それは、信仰者同士がお互いに同朋として、自由で風通しの良い人間関係に立ち、自他の人格とその決定を尊重することである。信仰には先達もいれば後発組もいるし、指導的立場の者もいれば指導を必要とする者もいる。しかし、信仰者であると自覚した以上、自らの信仰には自らが確固たる主体的姿勢を持つべきである。他者からのエンパワーメントに依存しているようでは、まだ受け身の信仰である。信仰には自尊心と誇りが不可欠である。信仰とは自らに自信を持って進む道、すなわち「信仰＝信心＝自信の道」だからである。

宗教教団の時代は終わって、今はスピリチュアルな「個人教」の時代になったと、したり顔で言う宗教学者もいるが、私はそうは思わない。一人ひとりが自らエンパワーされ、活力ある自由と、責任に裏うちされた主体性とを得たならば、どんな組織や共同体も活性化せざるを得ないのだ。

単に寄せ集めた人数だけの力を出すのではなく、それ以上の力を引き出すのが優れた集団のあり方である。不完全な部分があるもの、人間一人ひとりの生きた主体的信仰をそれぞれの仕方でも生かしていくことで、どんな宗教教団もさらに伸展する可能性を有しているはずである。